

第 30 回三番瀬再生会議議事録（抄）

「ランドデザイン」ワーキンググループの検討結果について

○ 吉田副会長からの報告

ランドデザインというのは、長中期、短期という時間軸に沿って再生目標、目標生物、これに関連する人と自然の関係などを検討していく。二つ目は三番瀬全体をゾーニングして、その中で再生目標や目標生物を考えていく。そして、長期的な理想と現実的な制約を結ぶロードマップをつくらうという目標を持ってこの議論を始めた。

再生ランドデザインを行うにあたっての原則は、最初に円卓会議で三番瀬再生計画（案）の目標というものは尊重し、現在残されている生物多様性を大切にするとともに、現状以上に豊かなものにする。それから、長期的、短期的な目標がつながるとともに、細かいところだけでなく三番瀬全体を俯瞰的に見て全体が得をしていくような相利的な関係に転換できないかといった点。それから、目標実現のための途中の道筋（ロードマップ）というものを重視していくという視点。3番目として、三番瀬再生会議の議論を尊重しながら、漁場再生とかまちづくりについては、この再生会議以外にも、漁場再生検討委員会とか、地元市の意向、あるいは地元市で開いているような会議の意向も尊重していく。そういった原則を持ちつつ考えていこうということを議論いたしました。

時間的ランドデザインにつきましては、後ろから2枚目の表1の「時間軸に沿った三番瀬再生のランドデザイン」をご覧くださいと思います。

まず、目標年の設定ということですが、たまたま今年10月に生物多様性条約COP10が名古屋で開催され、「生物多様性2010年目標」に代わる新しい目標が議論されているわけです。日本政府提案では、2050年を長中期目標、2020年を短期目標としています。

これは3月につくられた「生物多様性国家戦略2010」の中にも、2050年までに人と自然の共生を実現させ、生物多様性の状況を現状以上に豊かなものとして人類が享受する生態系サービスの恩恵を持続的に拡大させていく。そのために2020年までには生物多様性と生態系サービスの現状に対する理解を浸透させ、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する活動の拡大を図るとして、幾つもの目標が書かれているわけです。

日本政府提案というものを参考に三番瀬の再生目標年も考え、2050年を長中期目標の目標年とする。そして短期目標の目標年2020年と合わせるのがいいのではないかと。

そして、再生目標として、2050年までに、三番瀬の全域にわたって多様な環境（砂質・泥質、汽水・海水、干潟・藻場等）と生物多様性が再生される、安定的な漁業生産が継続される、人と生物の豊かな関係が取り戻される、そして東京湾全体にその恩恵が行き渡っていく。そういう高い目標を掲げて、その目標生物としては、植物はアマモ、コアマモ、シオクグ。無脊椎動物ではハマグリ、クルマエビ、シバエビ、ワタリガニ。魚類ではイシガレイ、コハダ、クロダイ、アナゴ、ウナギ。鳥類ではマガン、ツルシギ。これは三番瀬というものが国際的な渡り鳥などにとって重要な湿地であるということ象徴するようなものである。新たな回復が必要になってくるのですが、かつての東京湾を象徴するようなアサクサノリとかアオギスというものについても目標にしたらいのではないかと、そういう議論がありました。

そして短期目標としては、三番瀬全体とはいかないですが、三番瀬の一部に少しずつ環境が改善されて生物が回復していく。それから、漁場環境が改善され、漁業が安定化に向かう。環境学習の場がつくられて、ルールに基づいた市民の三番瀬利用が行われる。これをあと10年の目標にしていったらどうか。目標生物としては、一部重複しますが、アシ、アマモ、コアマモのような植物や、アサリ、チゴガニのような無脊椎動物、それからトビハゼ、シロチドリ、バンというものが挙げられました。

留意点として、自然再生というものは必ずしもこのようにうまく段階的に進むだけではなく、早期に着手しても時間がかかるもの、生物の回復のために時間がかかるものがあるということです。

次に、三番瀬再生のための時間的なランドデザインと、空間的ランドデザインに関しては、表2と図1をご覧ください。

海域区分というものに関しては、今までそれぞれ人によって呼び方が違っておりました。大体こういう形だったら自然環境調査の結果とも合致して比較的わかりやすいのではないかと、そういう海域区分を行いまして、それに基づいて目標を考えていきました。

まず、市川航路の西側ですが、これはかなり細かく分かれています。が、市川塩浜3丁目と入船地先については、現在残されている生物多様性を大切に、少しでも豊かにしていくことを目標にする。

塩浜2丁目地先に関しては、陸と海との連続性の回復による潮間帯の生物の回復と人と自然のふれあいの回復というものを目標にしていき、市川市の意見も踏まえて市川市所有地前面など部分的に浜に下りることのできる環境学習の場とすることが期待されます。

市川塩浜1丁目地先に関しては、漁場の整備と1丁目の護岸整備というものがございますので、それぞれの検討委員会での検討を反映するべきである。

次に、浦安市日の出地先の部分ですが、現在、砂洲が発達して、アサリ、シオフキ、マテガイ、ゴカイなどが生息しております。浦安市の環境学習施設が隣接して計画されていますので、浦安市の意見も踏まえて、陸と海との連続性の回復による人と自然のふれあいの場の創出、ルールに基づいた利用というものを再生目標としていく。ここでは特に注目すべきこととして、人工濠周辺でアマモの一部回復が見られるので、アマモの安定的な生育とかクルマエビの生息というのを目標生物とできるのではないか。

それから、市川航路西側漁業権漁場内ですが、ここはノリ・アサリ漁業の安定化、漁場に青潮などからの回復力をつけることを目標にしていく。

市川航路の東側は、漁業権漁場外の部分と、漁業権漁場内の部分がございます。このうち、ふなばし海浜公園地先では、環境学習の場、海とふれあいの場としての整備が期待されます。ただ、利用形態が多様になっていますので、船橋市あるいは船橋市漁協の意見も踏まえて、海域の利用ルールの再検討が必要ではないか。

市川市東浜では海浜植物が見られますので、海浜植物からアマモ場に至る連続性というものを取り戻すという目標が考えられるのではないか。

市川航路東側の漁業権漁場内では、ノリ・アサリ漁業の安定化、クルマエビ、ワタリガニ、ハマグリなどを含む豊富な魚種の回復を目標とします。ただし、市川航路に貝殻が流されるという問題があったり、密漁の問題ある。また、船橋市漁協の将来計画として、付加価値を高めた都市漁業としてのあり方というものが模索されておりますので、ラム

サール条約登録による三番瀬ブランドの創出等が期待されております。

最後に、市川航路あるいは江戸川放水路などを含む航路・放水路部分に関しては、大型船が航行することによって周辺のアサリ漁場の底質の安定化を妨げているという意見もごございますので、底質の安定化というものを検討する必要があります。また、江戸川放水路は、洪水時の漁業への影響、あるいは通常時における流域管理、汽水域の回復ということが期待されまして、できれば目標としては、ウナギ、アユなどが遡上していく。あるいは人と自然のふれあいという観点から、江戸川放水路沿いのグリーンベルトをつくっていったほうがいいのではないか。

以上が空間的なランドデザインでございます。

それから、三番瀬ランドデザインに向けたロードマップということで、4枚目の裏に四つほど書きました。

青潮の発生の一因となっている浚渫窪地に関しては、現在も浚渫土を入れているわけですが、なるべく航路の浚渫土を優先的に使用するなど取組を継続していく必要がある。

2番目に江戸川放水路と行徳可動堰。江戸川放水路のワーキンググループの検討結果に基づいて河川整備計画に対して流域自治体の意見を提出する、あるいは必要に応じた国土交通省との協議を行っていく必要がある。

3番目として、周辺地域（行徳湿地、谷津干潟、流入河川）との関係を回復するということで、これらの湿地と海域との効果的な海水交換の促進、あるいは三番瀬に流入する河川に関しては千葉県と関係市が共同して広域的な対策を執る。

4番目についても、「賢明な利用」というラムサール条約の理念が理解されることが非常に重要だと思っておりますので、生物多様性の保全ということと、漁業活動、自然とのふれあいという活動が矛盾なく行われるように検討を進めていく必要があるのではないか。

最後に、2010年度（平成22年度）がこれまでの事業計画5カ年の最終年で、来年度（平成23年度）からは新しい5カ年計画が始まるわけですが、今後12月までの間の三番瀬再生会議で来年度以降のこの5カ年計画に反映すべくランドデザインについての活発な議論をお願いしまして、ぜひとも来年度以降の事業計画に反映させていただきたい。それには、来年度以降も再生会議の下に具体的な推進を行うスキームをぜひつくっていただきたい。

○議事（意見交換）

大西会長 特にロードマップが整理されていて、目標を短期、中期、長期と分けて、それぞれをどうこなしていくのかという道筋をつけていただいているという点が非常に重要な点かと思えます。

かつ、円卓会議のレポートから7年ぐらい、基本計画からは4年ぐらい経っているので、ということで、現職の方が自分の計画を持つことも大事だと思います。だから、こういう基本的なスタンスも更新することも必要だ。委員の中でも円卓会議の議論には加わっていない方もいらっしゃるわけですから、もう1回新しい格好でまとめるということも必要だと思っていて、いろいろな意味で意味があると思います。

ただ、基本計画、事業計画、実施計画とランドデザインがどういうふうに絡むのか。その辺の整理も必要だと思っております。ただ、このランドデザインというのは、今ま

での基本計画や円卓会議の中ではなかった目標生物を特定することも含まれ、アップデートする価値もあるということで、非常に重要なことではないかと思っています。

倉阪委員 このグランドデザインの位置付けとしては三番瀬の再生計画の視野をかなり伸ばしたような、長期ビジョンのようなものになるなと思います。

やはり時間軸の名付け方ですね。これは短期が2020年というのは、普通の行政計画で10年で短期というのではないので、例えば 2020年目標、2050年目標 というような形で、「短期」とか「長期」を使わないで書いたほうがいいかな と思いました。

後藤委員 ぜひこれを今年中にかなり詰めて、次期の事業計画にグランドデザインに則ったロードマップがどういうふうになったら再生がうまくできていくのか、再生会議の中でまずつくっていただきました。それから、総合的な部署で、具体化する仕組みを早急につくっていただきたいと思っています。

木村委員 グランドデザインという形の中に、都市と三番瀬 ということにもう少し入っていてもいいのではないか。都市の人が自然を大事にしていこうというところを取り入れていったほうがいいんじゃないかと僕は思う。

後藤委員 今の パブリックアクセス をどうするのかという議論は、早急に詰めていく必要があると思います。

川瀬委員 「自然の水循環の回復」 ということを出ていたのですが、水循環というと、海の中での流れだけではなく、雨から川に行ったり海に行ったりということも重要だと思うのです。そうすると、三番瀬のその場や沿岸の市町村だけにとどまらず、流域や流域外の県民も取り込む内容に入れていただければ と思います。

発言者E 埼玉から来ましたEと申します。

この中に地域区分の絵があるのですが、これは相当重要な図面ではないかと思いますが、ぜひよくよく検討してほしいと思います。

と申しますのは、この中で「人とのふれあい」という項目がいろいろなところに出てくるのですが、「人とのふれあい」と言ってもいろんな濃淡があり、オーバーユースという問題は常に都会ではつきまとう と思うのです。手をつけずにそのままそっとしておくという自然もやっぱり大切にしておかなくては いけないと思いますので、その辺はぜひ慎重に検討していただきたいと思っています。

大西会長 基本計画は、その前に円卓会議のレポートがあって、それを土台にして2年かけて、今よりずっと多くの回数の会議をやって議論してつくったわけです。今年、このグランドデザインをまとめようという場合に、そういう密度はなかなか難しいということになると思います。したがって、グランドデザインの中で基本計画にないこの点を特に重視して、お互いが補完関係に立つというグランドデザインの狙いを明確にして、その狙いに沿ってまとめる必要があると思います。

具体的には、これは、三番瀬の目標をわかりやすく、あるいは具体的な生物指標などを入れて示していく。それから各地域についても、かなり事業が進んでいる護岸などもありますので、そういうことを踏まえて整理していくことが必要になっているし、時間軸ということもロードマップなどをつくっていく上で重要になってくるということで、もう一歩進めて今年取りまとめるということで作業を進めていきたいと思うのですが、具体的には、ワーキンググループの方々にここまでやっていただいたので、それを受けて

吉田副会長にどうやって進めていくかということを含めて考えていただいて、事務局にも協力していただきながら、次の会議では一步進んだ格好で提案していただいて、あと2回の会議の中でぜひまとめるという方向で進めていきたいと思います。

遠藤委員 前回はワーキンググループをつくって報告をまとめたわけですが、これをどう進めるか、そのスキームを検討してもらいたいということをあえて書いておきました。

それから、この海域分けもあくまでも仮のものであって、こういうものを具体的に出して行って議論していきましようというスタート地点だと思っている。なぜかといいますと、円卓会議の基本計画はある面では非常に具体性がない、非常に抽象的なのですね。そういう意味でいうと、もっと議論しなくてはいけない。

何を申し上げたいかといいますと、このワーキンググループを今後継続的に発展的に進めるために、円卓会議の中の常置委員会として設置していただきたい。

そして、県にできることと県にできないこと、そういう情報をもっと集約して、もっともっと多く積極的に進める、常時そういう検討をしていかなければいけない。

県にしても市にしても、この問題はどこで決めるのですかということになったときに、この会議が多分最高の場だと思うのですね。逆に、今の段階では、この場で決めればある程度進んでいくのではないかと。今後も進めていくというための委員会を設置していただきたい。あるいは設置することが大事だろう。それを提案させていただきます。

大西会長 このグランドデザインについては、今年ちょうど計画のPDCAのC、事業計画を迎えるということになるので、そのタイミングということもあって取りまとめを図っていきたくと思うのですが、委員会の設置については、長期的・恒常的な常置委員会としてあるテーマの会を設定するのがいいかどうかについては、皆さんの意見も伺わなければいけません。ここは吉田副会長にお任せして、案を少し整理していただいて、どういうふうに進めていくのか、それについて私に連絡していただいて、準備をしていただきたいと思います。

今年だけではなくて今後ともこういうものが必要だということになれば、評価委員会と並んで何か組織をつくるということも提案の一つにはなり得ると思います。

一応ワーキンググループはここまでということをお願いしておりますので、一応今日の報告で一区切りして、さらに今までのワーキンググループで少し延長させてある程度切りのところまで行くということであれば、それも一つの判断なので取りまとめの3人の方にそこは中心になってお考えいただきたい。そして私に相談していただきたい。

工藤委員 ちょっとお願いがございます。漁業関係では別の会議もあります。そこでやっているのもある程度のグランドデザインをちゃんと持っていて、それによって短期であるとか中長期であるとか目標を定めて仕事をしてきているので、目標生物とか、あるいは中短期の時間とか整合性をとっていただけるとありがたいと存じます。

もう一つゾーニングも、漁業のサイドでは漁場特性マップというのをつくってまいりました。かなり時間をかけて、費用もかけて、丁寧につくってきたわけです。そういうものもぜひ空間的な検討のときに整合性をとっていただきたい。

大西会長 ぜひ必要な情報も提供していただいて、そうしたいと思います。

それでは、取りまとめ委員の方にご負担をかけますが、よろしく願いいたします。

以上